

戦後保育雑誌における健康保育の思想に関する考察

－昭和20年代『幼児の教育』誌の連載「幼児の健康保育」から－

久恒拓也¹⁾*

1) 新見公立大学健康科学部健康保育学科

(2021年12月1日受付、12月22日受理)

本稿は、「健康保育」が戦後の保育界においてどのように用いられ、またとらえられていたのかを、保育雑誌『幼児の教育』における連載特集記事から検討したものである。結果、「健康保育」は総じて、こどもの疾病予防と体調管理、それらに連動した保育・看護の方法などを指していたと思われる。また、特集執筆者の平井信義は「健康保育」が日々の保育実践と区別されたものでなく、年間の計画や保育者の振り返り、毎日の子どもとの触れ合いの中に溶け込んだものとしてあるべきことを説いていたことも明らかになった。

(キーワード) 保育思想、保育雑誌、戦後

はじめに

「健康保育」とはどのような概念であろうか。それは必ずしも明確でないように思われる。現在は保育士養成校の校名や学科名に使用されており^{注1)}、一定の認知があるとみえる。一方、最新の保育用語辞典には「健康保育」の事項はみられず(例えば東京大学大学院教育学研究科附属発達保育実践政策学センター 2019)、学術的用語としては定着していないといえよう。

歴史的にみれば、「健康保育」が大きく取り上げられたのは敗戦から間もない頃である。幼稚園の教育刷新にあたって、文部省は保育の基準を作成する必要に迫られた。GHQの民間情報教育局顧問ヘファン助言のもと作成された『保育要領試案(幼児教育の手引き)』^{注2)}(1947年2月)に「健康保育」が現れる。

『保育要領試案』は幼児(2~6歳)のために望ましい経験を準備することを原則とし、保育内容を従来の5項目から改め「見学」「リズム」「休息」「自由遊び」「音楽」「お話」「絵画」「製作」「自然観察」「ごっこ遊び」「劇遊び」「人形芝居」「健康保育」「年中行事」で組み立てることを構想した(国立教育研究所 1974, 1405-1406)。ここで「健康保育」が登場するが、その後学術論文等で広く取り上げられることはなかった。

そこで、本稿では「健康保育」が戦後直近の保育界においていかなる意味で用いられ、どのようにとらえられていたのかを保育雑誌の健康保育特集から考察したい。

1. 健康保育特集の概要と掲載誌『幼児の教育』

本稿の分析対象は、保育雑誌『幼児の教育』内の特集「幼児の健康保育」である。『幼児の教育』は、2021年現在も発行されている代表的な保育雑誌の一つである。その前身の『婦人と子ども』誌は、編集担当の東基吉の「正しい幼稚園教育思想を成るべく早く一般に普及させたい念願から」1901年に創刊された(東 1951, p. 33)。誌名は1919年1月に『幼児教育』(第19巻第1号から)になり、その後、1923年9月に『幼児の教育』(第23巻第9号から)へと変わった。

同誌の編集・発行は東京女子高等師範学校附属幼稚園内に結成された「フレーベル会」が中心に行なった。本稿では、復刊第三期にあたる巻号を使用した。第三期の復刊には、お茶の水女子大学附属幼稚園の所蔵本や、同大学附属図書館、倉橋文庫の所蔵本が底本となっている(津守 1981)。

「幼児の健康保育」^{注3)}は、『幼児の教育』第49巻第6号(1950年6月発行)から、通算15回掲載された特集記事である。著者はすべて平井信義(1919-2006 愛育研究所員・お茶の水大学助教授・当時)が担当した。平井は東北帝国大学医学部出身の小児科医であった。

本特集掲載の趣旨等は示されていないが、同号の編集後記によると、「平井氏の講和は、大切な健康保育について氏の理論と経験から、くわしく書いて下さることになっています。山下氏の幼児心理につづく連載講話として、毎号を御期待御精読下さい」とあり(p. 44)、専門家による連続講話の第二弾という位置づけになっている。

*連絡先: 久恒拓也 新見公立大学健康科学部健康保育学科 718-8585 新見市西方1263-2

2. 「幼児の健康保育」の特集内容

第1回（1950年6月）の記事には、今後の特集予定として目次が組まれていた。詳細は下記のとおりである。第一部は保育の実際と関連の深い事項を中心にし、第二部では子どもの健康にかかわる概念や医学的知識をまとめ、第三部では嘱託医等の医療制度を挙げていたことがわかる。

第一部

- (1) 保育案
- (2) 保母の健康
- (3) 健康保育のための施設
- (4) 入園当初の注意
- (5) 調査する事項
- (6) 視診と病気の早期発見
- (7) 基本的な衛生の躰け
- (8) 予防注射とその意義
- (9) 健康保育一日
- (10) いろいろな検査、測定
- (11) 母の会と母の講座
- (12) 家庭訪問
- (13) 遠足と運動会
- (14) 健康教育の方法（お話、紙芝居）
- (15) 一ヶ月期及び一年の整理

第二部

- (1) 幼児の教育
- (2) 養護
- (3) 栄養
- (4) 病気
- (5) 看護
- (6) 体質
- (7) くせ
- (8) こころの衛生
- (9) 公衆衛生
- (10) 健康の意義

第三部

- (1) 嘱託医
- (2) 保健所及び医療制度
- (3) 保育の育児教育

次に、実際の各回の内容を見ておこう（表1）。予定していた「目次」にくらべると、「視診と病気の早期発見」に多数の回が割かれていることがわかる。そして、全体的に第一部が主内容となっており、二部、三部はあまり触れられていなかった。

3. 「健康保育」の意味するところ

上述の構成から、本特集における「健康保育」は子どもの疾病予防と体調管理、それらに連動した保育・看護の方法などを指しているとみえる。ここでは、具体的な「健康保育」の内容についてどのように表現されているのかを検討する。

15回の記事すべてを調査したところ、「健康保育」の概念は明記されていなかったため、第9回（1951年3月）の「健康保育の一日」を手がかりにした。

記述はまず、登園時の園環境が重要であるというところから始まる。園環境は健康保育にとって「清潔な雰囲気や「精神衛生の在り場」としての意義があるという。

幼稚園へいく、ということは子供にとっては精一杯の期待なのであります。元気よく家を出て、子供は決してゆっくり歩いてなどいきません。道草さえ喰わなければ子供たちは駆け足であります。待ち設けてある子供の世界へとまっしぐらであります。それに応えて幼稚園での世界が子供たちを待っていて欲しいのです。にこにこ迎えてくれる先生、昨日も一日友達であった積木、そして清潔な清々しい室・机・椅子—みんな子供たちのこころの中に、無形の夢を養ってくれるものでありましょう。この夢がやがては理想となり、よい生活・健康な生活への希望となるものであります。夢を養うような雰囲気—これが最も大切な幼稚園生活だと私は思っています。（平井 1950.06, pp. 42-43）

次に、朝の視診が最も大切であること、手洗い・口すそぎを園児が行うことに言及する。保育案については、日光と空気的重要性を述べ、「戸外保育を充分取入れた案」「臨機応変に日光や空気を利用するという心構え」を保育者が意識するかどうか、子どもたちの健康・不健康の別れ道になるとさえ思うと主張した（同、p. 43）。

最後に、園児が帰った後の保育者の仕事については、①その日の子どもたちの行動を振り返って考えてみることや、②欠席児の様子の確認、③健康教育の積極的なプランを立てることを推奨していた。それぞれ具体的には①は「元気がありすぎて喧嘩をした正夫ちゃん、一昨日あたりからおあそびに進んで入らない佳子ちゃん。それぞれの問題について、先生自身の側と、子供の側とから考え合わせてみましょう。」（同、p. 43）という記述、②は「欠席した子供についても、電話をかけて様子をきくなり、暇を見付けて寄って見舞ってやることも忘れないでしましょう。先生に見舞ってもらうことは、お医者薬よりもっとよい薬になることがありますから」（同、p. 44）、③は「近頃、英子ちゃんはどうもお手を洗いたがらない、たかしちゃんはおちんちんをいじっている。之れらを正しく導くに

表1. 「幼児の健康保育」各回の内容

回(年月)	内容	詳細
第1回 (50年6月)	保育案 保母の健康	一年を通じての保育のプランがそのまま健康保育のプランになるよう考えてほしいこと 子どもの健康保育をする前に、保母の健康管理を行わなくてはならないこと
第2回 (50年7月)	入園当初の注意 調査について	子どもの疲労が家庭に帰ってからあらわれていないか母親とよく連絡をとる 伝染病、ツベルクリン反応、過去の病歴等の調査
第3回 (50年8月)	視診と病気の早期発見	朝の視診、咳、伝染病への注意、目の異常
第4回 (50年9月)	視診と病気の早期発見(続)	発疹、ハシカの見分け方、水疱瘡、猩紅熱、とびひ、ヘルペス、いば、虫による皮膚病
第5回 (50年10月)	視診と病気の早期発見(続)	首の腫れ(流行性耳下腺炎、結核性の病気)、のど・口の観察、耳・鼻の病気、顔色の観察
第6回 (50年11月)	視診と病気の早期発見(続)	子どもの清潔・不潔の調べ方(特に目やに、爪の垢、耳の垢)、薄着で過ごすことの重要性
第7回 (50年12月)	衛生上の基本的習節について	食事の自立、衛生の習慣づけ(歯みがき、洗顔、手洗い、うがい、鼻汁、排泄)
第8回 (51年2月)	予防注射とその意味	予防接種法の経緯、保護者に予防接種の重要性を理解してもらうことの大切さ、各種予防接種の解説(種痘、結核菌)
第9回 (51年3月)	予防注射(続き) 健康保育の一日 健康保育と疲労について	各種予防接種の解説(ジフテリア、百日咳、はしか) 登園時の清潔な雰囲気や日光と空気の重要性 健康教育の積極的なプランを立てること 疲労の定義、疲れやすい子どもの家庭環境を考える
第10回 (51年4月)	身体検査と測定	身体検査の意義 身体測定項目と要領(身長、体重、胸囲、座高) 月々の体重測定的重要性
第11回 (51年7月)	身体検査と測定(続)	栄養がよい、悪いの判定の仕方 脊柱と胸部、眼・耳・歯の検査 保育者の観察によって異常の早期発見をすることの重要性
第12回 (51年10月)	母の会・母の講座	母親にきかせたい疾病予防の話 社会病(結核、寄生虫病、性病) 夏の子どもの過ごさせ方 子どもの栄養について
第13回 (51年11月)	新しい育児のねらい	健康診断、親の心掛け、予防医学
第14回 (51年12月)	幼児の救急処置法と看護法	子どもを襲う災害、 刺傷・切傷、打撲傷、血腫、捻挫、脱臼、骨折、火傷、墜落、交通による災害、鼻血、目・耳に異物が入ったとき、喉にものがつかえたとき、痛みを訴えたとき、 発熱、溺死、はき気、便・尿異常等の際の対応と看護
第15回 (52年1月)	病気の看護をどうするか	出血、小さな事故への対処

はどういう方法がよいだろうか、……いろいろな書類の整理もしなければならない忙しい中にも、園長先生や同僚の先生方と、その方法についてあれこれ語り合うこともしたいと思います。」(同、p. 44)が見られた。以上の内容から、「健康保育」は一人ひとりの子どもに寄り添って行われる必要性があったと思われる。加えて、保育者の健康保育への共通理解や、子どもの基本的な生活習慣を重視していたことがうかがわれる。

4. 「健康保育」の重要性と課題

それでは、「健康保育」の実施に向けては当時どのような課題があったのだろうか。平井は「健康保育」の重要性を説きながら^{註4)}、保育者の仕事として定着させるには課題があると認識していたようだ。

彼は「幼稚園に経験の厚い方々とお話をする機会を得ま

したが、その方々の中に、子供のからだのことは医者とか保健師にまかせておけ、保母はからだの点まではとても力が及ぶものではない、それでなくとも忙しいのだから、というご意見」があり、それが非常に残念であると述べる(平井 1950.06, p. 37)。また「保母さんを養成する教育にからだの方面がおろそかであるのを不満に思っ」(同)いたこと、それを補う嘱託医や「保健婦」の巡回制度の確立は現在間に合っていないことを指摘していたことから上述の認識はうかがえる。

そこで平井は当時の保育界へのアピールの仕方として、海外の「健康保育」の理論紹介を選んだ。例えば第4回(1950年9月)の冒頭で、アメリカの心理学者・小児科医のアーノルド・ゲゼル(Arnold Lucius Gesell, 1880-1961)の論文抄を取り上げている。

時も時、私はこの講座のために原稿を書きながら

も、いつも、健康保育を強調することが、保母さんの大きな負担になりはしまいか、私の思いすぎになりはしまいかと内心恐れていたのです。處が1923年に書かれたゲゼル博士の論文は、この上なく私への激励となったのです。私はこの抄録をむさぼり読み、更にノートをしなが、恩師斎藤先生のご厚情を感謝し、且つ健康保育を促進する為、百倍の勇気を得たのであります。

ゲゼル博士は冒頭に於て、「健康管理所としての幼稚園」として、「幼稚園の先生は、健康増進を教育上の最高目標とすべきである」と云はれ、… (中略) …

「就学前の小児は、最も大きい發育を示す時であり、發育は遺伝の力にもよるが、同時に保健条件、—食物、空気、日光、遊び等が関係する。」「更に学童の身体的欠陥の多くは、幼稚園時代にその萌芽がみられる。」「公衆衛生の立場から見ても、就学前時代は基礎的予防が実際に行わなければならない時。」故に幼稚園は完全に公衆予防衛生の施策に副う可きであり、健康教育及び実際の健康増進設備と活動が必要となる……………」

今から四分の一世紀前に、アメリカでゲゼル博士が唱えたことを、今ここに私共が声を荒げて叫ばなければならぬのは本当に情けないことではありますが、声を荒げることさえ控えめに一と感ずる私には、この抄録は天与のもののように思えたのであります。(平井 1950.09, pp. 26-27、下線は引用者)

このように、特集「幼児の健康保育」の理論的基盤を強化するために、アメリカの心理学者兼小児科医の言質を利用していた。下線を付した引用箇所については、「幼児の健康保育」の重点的な内容との重複が見られ、平井がアメリカの動向を参考にしていたこともわかった。

アメリカの健康保育情報の利用はほかにもある。第7回(1950年12月)では、文部省初等教育顧問ガートルード・エム・ルイス(Gertrude M. Lewis, 1896-1989)が健康教育について講話した内容を紹介している。「向うの幼稚園では、医者とか看護婦の連絡が大変密接に行なわれていることは、私共にとって羨ましい制度ですが、そうかといって幼稚園の先生方が「朝の視診」を短い時間で要領よく実施することは怠っていないそう」であることや、子どもが挨拶をしに来るときに、目や手などの視診に大切な項目を観察し、そのために戸口に椅子を置いて保育室に入る前に視診を完了させることなどが記されていた(平井 1950.08, p. 37)。

おわりに

以上のように、本稿では「健康保育」の意味内容や扱

れ方を保育雑誌の特集から検討してきた。特集で予定されていた事項は①保育の実際と関連の深い事柄、②子どもの健康にかかわる概念や医学的知識、③嘱託医等の医療制度、の大きく3つであった。実際には紙幅の都合もあってか、①の事項が中心に扱われていた。

「健康保育」は総じて、こどもの疾病予防と体調管理、それらに連動した保育・看護の方法などを指していたとみえる。執筆者の平井は、「健康保育」が日々の保育実践と区別されたものでなく、年間の計画や保育者の振り返り、毎日の子どもの触れ合いの中に溶け込んだものとしてあるべきことを説いていた。

「健康保育」の学術的バックグラウンドは、当時のアメリカの健康教育実践にあり、平井はその中から特に、日光を利用した園環境の構成や保育計画の促進、当園児の視診による疾病予防などが大事であると考えて、保育界への紹介に紙幅を割いていたと思われる。

本稿の今後の課題として、①戦後の健康・保健教育(義務教育を含む)の動向を射程に入れた考察、②当時の教員や学識者の知識刷新に貢献した教育指導者講習(IFEL)の中での幼児教育関係の内容との比較、③幼稚園と保育所の差異に注目しての考察等多くの点が挙げられる。

注

- 1) 厚生労働省「指定保育士養成施設一覧(R3. 4. 1現在)」によれば、大阪健康ほいく専門学校(保育科・初等教育科)、新見公立大学健康科学部健康保育学科が「健康保育」の名称使用例として認められる。このほか、「子ども」と「健康」を組み合わせる学校名もある(九州女子短期大学子ども健康学科、至学館大学健康科学部こども健康・教育学科等)。
- 2) 『保育要領試案(幼児教育の手引き)』は戦後の保育内容の指針として打ち出された。1956年にそれに代わる「幼稚園教育要領」が刊行された際に、大枠が引き継がれた。
- 3) 本稿で対象とした「幼児の健康保育」の記事はすべて復刻版の『幼児の教育』を参照した。
- 4) 例えば、「視診による病気の発見についてお話したわけですがあなた方保母さんは、子供の生活の半分を導いている方々でありますから、以上お話した分の知識は是非持っていただき、子供のよき保護者であると共に、母親のよき助言者であって欲しいと思います。」(平井 1950.06, p. 37)と述べている。

文献

- 1) 秋田喜代美監修・東京大学大学院教育学研究科附属発達保育実践政策学センター編：保育学用語辞典。中央法

- 規, 2019.
- 2) 猪熊弘子: 健康・安全と保育. 汐見稔幸・無藤隆・大豆生田啓友編: アクティブート保育学① 保育原理. ミネルヴァ書房, 2019.
 - 3) 国立教育研究所編: 日本近代教育百年史第6巻学校教育 4. 教育研究振興会, 1974.
 - 4) 津守真: 解題. 幼児の教育復刻刊行会編: 復刻・幼児の教育 第52巻 昭和・戦後篇, 名著刊行会, 1981.
 - 5) 東基吉: 婦人と子ども(幼児の教育の前身)創刊当時のこどもと其頃の幼稚園の状況に就いて. 幼児の教育, 50(11), 1951. 幼児の教育復刻刊行会編: 復刻・幼児の教育 第50巻 昭和・戦後篇, 名著刊行会, 1981, 40-44.
 - 6) 平井信義: 幼児の健康保育(1). 幼児の教育, 49(6), 1950.06. 幼児の教育復刻刊行会編: 復刻・幼児の教育 第49巻 昭和・戦後篇, 名著刊行会, 1981, 37-40, 43.
 - 7) 平井信義: 幼児の健康保育(2). 幼児の教育, 49(7), 1950.07. 幼児の教育復刻刊行会編: 復刻・幼児の教育 第49巻 昭和・戦後篇, 名著刊行会, 1981, 36-40.
 - 8) 平井信義: 幼児の健康保育(3). 幼児の教育, 49(8), 1950.08. 幼児の教育復刻刊行会編: 復刻・幼児の教育 第49巻 昭和・戦後篇, 名著刊行会, 1981, 35-39.
 - 9) 平井信義: 幼児の健康保育(4). 幼児の教育, 49(9), 1950.09. 幼児の教育復刻刊行会編: 復刻・幼児の教育 第49巻 昭和・戦後篇, 名著刊行会, 1981, 26-31.
 - 10) 平井信義: 幼児の健康保育(5). 幼児の教育, 49(10), 1950.10. 幼児の教育復刻刊行会編: 復刻・幼児の教育 第49巻 昭和・戦後篇, 名著刊行会, 1981, 38-42.
 - 11) 平井信義: 幼児の健康保育(6). 幼児の教育, 49(11), 1950.11. 幼児の教育復刻刊行会編: 復刻・幼児の教育 第49巻 昭和・戦後篇, 名著刊行会, 1981, 40-44.
 - 12) 平井信義: 幼児の健康保育(7). 幼児の教育, 49(12), 1950.12. 幼児の教育復刻刊行会編: 復刻・幼児の教育 第49巻 昭和・戦後篇, 名著刊行会, 1981, 37-41.
 - 13) 平井信義: 幼児の健康保育(8). 幼児の教育, 50(2), 1951.02. 幼児の教育復刻刊行会編: 復刻・幼児の教育 第50巻 昭和・戦後篇, 名著刊行会, 1981, 36-41.
 - 14) 平井信義: 幼児の健康保育(9). 幼児の教育, 50(3), 1951.03. 幼児の教育復刻刊行会編: 復刻・幼児の教育 第50巻 昭和・戦後篇, 名著刊行会, 1981, 40-45.
 - 15) 平井信義: 幼児の健康保育(10). 幼児の教育, 50(4), 1951.04. 幼児の教育復刻刊行会編: 復刻・幼児の教育 第50巻 昭和・戦後篇, 名著刊行会, 1981, 41-45.
 - 16) 平井信義: 幼児の健康保育(11). 幼児の教育, 50(7), 1951.07. 幼児の教育復刻刊行会編: 復刻・幼児の教育 第50巻 昭和・戦後篇, 名著刊行会, 1981, 42-46.
 - 17) 平井信義: 幼児の健康保育(12). 幼児の教育, 50(10), 1951.10. 幼児の教育復刻刊行会編: 復刻・幼児の教育 第50巻 昭和・戦後篇, 名著刊行会, 1981, 49-53.
 - 18) 平井信義: 幼児の健康保育(13). 幼児の教育, 50(11), 1951.11. 幼児の教育復刻刊行会編: 復刻・幼児の教育 第50巻 昭和・戦後篇, 名著刊行会, 1981, 47-51.
 - 19) 平井信義: 幼児の健康保育(14). 幼児の教育, 50(12), 1951.12. 幼児の教育復刻刊行会編: 復刻・幼児の教育 第50巻 昭和・戦後篇, 名著刊行会, 1981, 43-48.
 - 20) 平井信義: 幼児の健康保育(15). 幼児の教育, 51(1), 1952.01. 幼児の教育復刻刊行会編: 復刻・幼児の教育 第51巻 昭和・戦後篇, 名著刊行会, 1981, 49-55.